

第一章

パーティクルエクスペリメント

実験開始

「なつかしい……かあ。実感ないんだよね」

桃色くせ毛でおさげの少女・陣内千咲じんないちさきは中学校への登校中、十一月十一日の晴れ渡る秋の空を見上げて小さく嘆息たんそくする。

この『なつかしい』とは彼女の父親がここ一週間のあいだずっと並べている言葉である。今朝方は地元TVのニュース番組『おはよう湯川市』で駅前のケーキ屋がクローズアップされたときに「あ、あれ。なつかしいなあ」という形で使われていた。ちなみに彼が指す『あれ』とはケーキ屋のことではない。ケーキ屋の店先にある街灯の柱に、彼が幼い頃に書きこんだ幼い頃の母親との愛の相合傘である。

昨夜に放たれた『なつかしい』は、千咲が小学一年生の途中までしか使わなかった倉庫の中のランドセルに対する「うむ、なつかしいでござるな」だった。その後、父親がランドセルに刺さっていたソプラノリコーダーで一人チャンバラごっこを始めたことは言うまでもありません。出したら仕舞しまってね、お父さん。

さて、陣内さん一家がこの素粒子物理学そりゅうしぶつりがく研究の街・湯川市ゆかわに再び越してきたのは、十一月四日。

ほんの一週間前のことである。

愛の相合傘に関しては存じませぬの一言に尽きるのだが、一年生の途中までしか使わなかったという昨晚のランドセルに関してなつかしいとは寸分も思わなかったことは、千咲

にとつて腑ふに落ちないことだった。

千咲も含め、陣内さん一家は千咲が一年生になった年の秋くらいまでは湯川市に住んでいたのだというのだが、千咲にはそのころの記憶が全くないのだ。

千咲の両親はもともと生まれも育ちもこの湯川市で、家は隣同士、学校の席に至っては小学校一年生から高校三年生に至るまで常に隣同士という圧倒的幼馴染おさなじみであつた。本人たちには言わせれば腐れ縁の幼馴染おさなじみなので『腐れ馴染』だそうだ。言葉の響きを除けば、非常に羨ましいうらやシチュエーションである。

物心ついた頃には既に、僕は（私は）この子と結婚する、と決意していたらしい。ずいぶんと狭い世界観である。

高校卒業後、そのまま同じ大学に行き、市内で就職し、結婚した。

彼らが結婚するまでのイチヤラブストーリーについては割愛する。不毛だ。

結婚してすぐ母親は千咲を身ごもり、無事出産。その後七年間はずっと湯川市にいたわけだが、母親が病を患わずらい、その療養のために隣の県へ引っ越した。そしてほんの一週間前、約六年ぶりに湯川市に戻ってきたのだ。

生まれてこの方、湯川市で過ごした時間の方が長いはずだし、何より大好きな両親に愛されて育つた貴重な時間であるはずなのに、全く覚えていないというのはなんだか寂しかった。

「千咲ちゃん、おはよー」

「あ、おはよー」

近所に住む同じ二年C組の友達・山本滴と朝のあいさつを交わす。

引越してきたばかりの頃は、記憶のこと以外にも周りの子と仲良くできるかどうかというところが千咲の頭を悩ませていたが、その点は問題なかった。ほんのわずかではあるけれども千咲のことを覚えている子もいたのだ。自分の方は全く覚えていなかった。バツが悪かったが、六年も前のことだからしようがないとみんな笑ってすませてくれたので幾分気持ち楽だった。

滴もその一人だった。家が近く、部活も一緒なので転校以来いろいろと面倒を見てもらっている。二人の通学路は近所の菱川橋を渡ったところで交わるので、朝もこうしてそこで合流するのだ。

「いやいや千咲さん、今日もかわいいですな。その服、似合っておりますよ」

「何を言ってるのさ。制服なんだから服はみんな一緒じゃないの」

このようにふざけあうくらいには仲良くなっていた。

いま話題に出た彼女たちが通う国立湯川学園中等部の制服は襟に二本の臙脂色の細いラインが入った紺色のセーラー服だ。スカートではなくリボンタイを採用している。胸当てにも二本のラインが入っている。

胸当てには湯川学園の校章が刺繍ししゅうで入っているのだが、この校章が独特である。

全体としてアルファベットの『Y』に見えるように描かれているのだが、『ファインマン・ダイアグラム』と呼ばれる、線の途中に方向を表す三角形のマークが入った点線や波線や実線が互いに交わる図形によって描かれているのだ。

「そういえば、この胸当てに縫ぬってあるのってうちの校章なんだよね？」

「あー、ファインマン・ダイアグラムってやつね」

千咲が尋ねると、察しの良い滴は今後の会話の展開を見越して千咲の疑問点を指摘する。うん、千咲が頷くと、

「あたしもよく知らないんだけど、うちのお父さんの話では、国を挙げてガンバってる研究分野で出てくる図形らしいよ」

「素粒子そりゅうし物理学ってヤツ？」

「そうそう。湯川市には国が指定した素粒子物理学の研究機関があるらしくて、うちの学校もその研究機関に附属してるんだってさ」

ふうん、としか千咲には返せなかった。

「そのせいでうちの学校は数学と理科の授業が難しいんだあ……。あたし、理科苦手なんだよね」

私も、と滴の愚痴ぐちに同意する千咲。通い始めてまだ一週間だが、数学と理科の授業のレ

ベルの高さには驚かされていた。先生の話だと、市外の高校生が勉強するような内容は中等部のうちに全て終わってしまうらしい。エスカレーター式だから高校受験がないとはいえ、相当早い。転校初日の数学の授業は微分積分で、理科の授業はヤングの干渉実験の話だった。

引越してくる前に、父親が物理学者をしている影響で、自学で先の学習内容を勉強していた勤勉な千咲ではあったが、湯川中学の同級生のレベルの高さを目の当たりにして、もつと頑張らないとな、と決意していた千咲であった。

たわいもない話で盛り上がりながら十五分も歩くと校門に着く。

校門に着いただけで学校に着いたわけではない。

国立湯川学園は初等部から高等部まであり、その下には幼稚園、上には湯川大学と研究施設群があるのだが、これらを全て同じ敷地内に収めてしまったために、総敷地面積は浦安の夢の園を遥かに超えてしまっている。

校門から出ているスクールバスに乗って十分ほど揺られて、やっと中等部の門まで辿り着く。それでも中等部や高等部はまだ近い方で、大学はそのさらに先だ。そう言われると千咲たち中等部生はみな、そのまま進学するのが少し億劫になった。

「このだだっ広さがなければ最高なんだけどな」

スクールバスを降りてすぐ出てきた友達の愚痴に対して、千咲は苦笑いで返す。転校初日、スクールバスに乗ることが分からなくて右往左往した挙句、徒歩で約一時間かかる道のりを歩いていこうと決意して数歩踏み出したところで校門のところにいる守衛さんに声を掛けられて助けてもらったことをなんとなく思い出した。

バスは中等部の門のところまで停まる。中等部の門から下駄箱まではとても近い。目と鼻の先だ。外壁が白く塗られた三階建ての鉄筋コンクリートの校舎とその上に広がる雲ひとつない青空を見上げ、千咲は今日も頑張ろうと息巻く。



十一時五十五分。

四時間目の授業が終わる五分前になると、二年C組の生徒たちのほとんどは心ここにあらずという様子になる。

ある男子生徒は既に椅子を引いて片足を机の外に出している。

ある女子生徒は組んだ両手を前に突き出して伸びをする振りをしてストレッチを行っている。

また、とある男子生徒は机の上の教科書もノートも全て片付けてしまい、もはや席につ

いてすらいない。まるで最初からいなかっただかのようなようだ。窓際の不利な席を割り当てられてしまった彼は、せめてクラスの他の生徒とのハンデだけは埋めてやろう、と匍匐前進ほふくで教室の後ろの引き戸を目指している。

次の時間は待望の昼休みなのだ。

そして、昼休みを充実したものにするためには、おいしい昼ごはんが不可欠。ゆえに熾烈な争奪戦が繰り広げられる。

湯川学園では高等部はもちろん、中等部にも給食制度がない。その代りに中等部と高等部に購買部が一つずつと、中等部と高等部のちょうど中間あたりに大きな食堂がある。

購買部で売っているものは一般的なコンビニと同じだ。パンやおにぎり、お菓子などが販売されている。

しかしながら、購買部の商品が昼に売り切れることはない。

生徒たちの人気は食堂に集中しているからだ。

食堂のメニューには定食だけでなく、うどん・そばといった麺類やカレー、かつ丼といった単品もの、さらには季節限定のデザートや週替わりのケーキまである。まさに至れり尽くせり。この充実っぷりが争奪戦の原因になっている。

なぜここまで食堂が充実しているのかというと、湯川学園は一学年の生徒の数が千人を超えるマンモス校だからだ。生徒のニーズに合わせるために多種多様なメニューを用意し

ているわけである。ただ、自分のお目当てのメニューを確保するためにはゆったり歩いて食堂に向かうわけにはいかない。

スタートは一秒でも早く、リードは一ミリでも多く。

——かつ井は俺のもの……！

——A定食（コラーゲンたっぷりヘルシー定食）は私のもの……！

——季節限定チーズカツカレーこそ我が全て……！

各々の思惑が心の中でこだまする。

教室内が殺伐とした空気に満ちてきた。千咲も遅れを取らないように右足を机から出し、いつでも椅子を引けるように右手で背もたれを掴んでいる。この一週間で身に付けた。

通称『臨戦態勢』。

ふう。教壇に立つ国語教師・灘坂なださかは一息吐く。

「授業を終える前に、一つ伝えておくことがある」

——何だよ！

——早く終われよ！

——勿体ぶりやがって……！

飢えた小さな狼たちは心の中で吠え、睨むようなギラついた目線で訴える。

「諸君らには非常に残念なお知らせだが……今日は食堂は休みだ」

……。

殺伐とした空気が緩和すると同時に、落胆の波紋が教室中に広がる。涎も全て口に戻る。数瞬の後には、匍匐ほふく体勢にあつた例の男子生徒を含め、クラスの生徒全員がまつすぐ前を向いて席に着いていた。瞳には数分前までのギラつきはもうない。

暴動でも起こるかと思悟してきた灘坂なださかはなんだか拍子抜けした気持ちになってこう付け加えた。

「今日は十二時半に市役所から研究所の実験に関する記者会見があるそうだ。全市民に関わる重要なことらしい。教室のテレビで観るので、各自昼食を用意して十二時半には教室に戻ってくることにしよう。いいな」

食堂が臨時休業すると購買部が大変な混雑になる、というのは少し考えればわかることだった。

その点、湯川学園の購買部は優秀である。もともと生徒数を鑑かんみて混雑を回避できるような広い店内になっていたのだが、食堂休業の知らせを受けて、さらに即席のレジを増設

していた。

ただ、それでもこの日の購買部の混雑は解消されない。決して購買部のみなさんの手際が悪いわけではない。普段食堂に行っている生徒の数が予想以上だったのだ。いつもは売り切れることのない購買部のパンやおにぎりがすぐに全滅してしまった。

「食堂がお休みするのってよくあることなの？」

なんとか確保したメロンパンと牛乳を両手に抱え、教室に戻る途中の千咲ちあきは隣を歩く滴に確認する。

「いや、あたしが中学に入ってから初めてだよ……。ああ、愛しのミラクルおむ☆らいすがああ」

滴は購買で手に入れたたまごサンドを虚ろな目で見つめながら溜息をついた。

右手がたまごサンドでふさがっているの、滴が左手で教室のドアを開けると、ちょうど記者会見の中継が始まる場所だった。二人は小走りで自分の席に戻り、包みから各々のパンを取り出して口に入れる。

『では、湯川市内での研究に関する記者会見を始めたいと思います』

黒のスーツに青いネクタイを着けた精悍な顔立ちの好青年がマイク越しにあいさつするのが聞こえると、ざわついていた教室内が静かになった。生徒たちも担任の灘坂も聞き耳を立てている。

まず、国会議員のなんとかという人が、国を挙げて新たな素粒子実験を始めることになったこと、ご多分に漏れず湯川市がその実験の拠点に選ばれたことを説明した。

『研究内容に関してですが、各研究所を代表して朝永研究所所長の朝永真一博士ともながしんいちにご説明いただきたいと思います。朝永博士、お願いいたします』

『みなさん、こんにちは。朝永です。今回の研究はごく少数の被験者を素粒子に見立てるることによって素粒子の反応を仮想的に観測しようというものです』

朝永と名乗る無精ヒゲぶしやうの似合う中年の男は気だるそうな口調で説明を続ける。

『様々な環境下での結果を観たいと考えておりますので、研究所内のみでなく、市街地でも実験が行われることもあるかもしれません。街中で発光現象や放電現象のようなものを見かけることがあるかもしれませんが、仮想的な実験であるため、被験者以外の人体には一切影響ありませんのでご承知おきください』

『被験者以外に影響がないという根拠は？』

会場にいる記者の中から質問が出る。

『素粒子は素粒子としか相互作用しません。あくまでも素粒子の実験ですから、素粒子とみなされていない一般市民の方たちには影響がないというわけです。ただ、実験の最中に被験者に近づくと危険ですので、発光現象などを見かけましたらその場から速やかに離れ、近くの建物内に退避してください』

『被験者の身体には影響があるわけですよ。被験者はどのように選ばれているのですか？』

『被験者は市内のごく一部の女子中高生です。被験者本人とそのご家族の方たちにはすでにご了承いただいています』

『それは一種の人体実験ではないですか！？』
市外から来た記者が批判する。

『それは極論すぎます。被験者にかかる負担は普通の学校で運動系の部活動をする程度のもので。多少の怪我はするかもしれませんが、大きな負傷をしたり、死亡したりということはあり得ません。実験終了後に彼女らに後遺症が残るようなことは万が一、いえ、億が一あり得ませんのでご安心ください』

『絶対だと言い切れますか！？』

『非常に稀^{まれ}ではあれど普通の部活動をしている際に生徒が大怪我をしたり亡くなったりしてしまう不幸な事件が存在する以上、今回の実験でも絶対とは言いきれません。この世の中に絶対なんてありませんから』

最後のこの質問には他の記者もこれはひどいという苦笑を浮かべていた。朝永はこれだから記者会見なんか出たくなかったんだ、という顔をしてから、

『要するに、市街地でもドンパチするかもしれませんが、近づかなければ安全なので、み

なさんご協力をお願いしますということではこれで失礼します』
と言ひ捨てて会場を後にした。

『実験に関して他に質問がある方がいらつしやいましたら、私がお答えしますので挙手で
お願いいたします』

まずいという顔をした青ネクタイの好青年が代わりに登壇とうだんしてマイクの前に立った。

『……』

『……』

そこからは専門家たちによる実験内容に関する具体的な質疑応答が行われていたが、千
咲たち中学生には難しい内容だったのと昼休みの終わりの時間が近づいていたのがあつ
て、担任の灘坂なださかがテレビの電源を消した。

「差し詰め、『君子、危うきに近寄らず』ってことだな。諸君らは興味本位で近づいたり
するなよ」

国語教師らしい昼休みの終了宣言である。



今は十一月も中旬だ。部活終わりの時間には日も暮れ始めていた。

「昼の放送、結局なんだつたんだらうね」

水泳部の部活を終えた千咲と滴は中等部の門からバスに乗って校門のところまでやってきた。校門から歩いて家まで帰るところで千咲はふと昼の放送を思い出していた。

「でも部活も中止になったりしなかったし、特に気にしなくていいのかもよ」

「そうかもね」

「てなわけで……」

じゃーん！ と滴が取りだしたのは朝の番組に登場していたケーキ屋『パティスリーYUKAWA』の割引券がついたチラシだ。

「あ、今朝テレビでやってた駅前のケーキ屋さんだ！」

「ご名答！」

うんうん、と滴は大きく頷く。

「千咲ちゃん、まだ行ったことないって言ってたよね！ これから行かないかい？」

「ふむ、断るわけがないんじゃないかい？」

「そうかい、そうかい！」

「予算はいくら？」

「たらなくても大丈夫！ 今日はおごりだ問題ない！」

「ありがたい！」

読者諸兄、お気づきだろうか。

「「ではいざ行かん！ とろけるように甘美なスイーツの世界へ！」

二人の間ではセリフに海産物の名前を入れて会話するのが流行っている。

端から聞いているとただのダジャレの応酬おうしゅうにしか聞こえない彼女たちの会話であるが、

千咲の歓迎会と題して女子水泳部で回転寿司に行ったことから流行り始めたそうだ。二人の間だけでなく、女子水泳部内全体で流行っている。華の女子中学生がなんということでしょう。

校門から湯川駅前までは徒歩二、三分で行けるほど近い。正確に言うと、駅から徒歩で行けるほど近い位置に学園が造られたのだ。学園内の移動こそバスだが、校門のところまでは湯川駅から歩いてくるという電車通学の生徒が大多数を占めるだろうという試算のもと、この好立地が選ばれたわけだが、それが見事に的中した形である。

電車↓徒歩↓バスというのは面倒だろうと言う意見もあつて、学園の建設計画が練られていた頃に学園内に地下鉄を通すという案もあつたようだが、機密保持のためと地下は実験設備に入る予定があつたためという二つの理由で却下されたのだと、千咲は電車通学の友人から聞いていた。

「さて、今日は何にしよつかない」

「滴しずくちゃんのオススメは？」

「ザツハトルテかなー。オーストリアから材料直輸入してるらしいから、本場の味が楽しめるよー」

「じゃあ、私はそれにしよう」と

パティスリーYUKAWAのドアを開けるとオシャレなドアベルがカランコロンと穏やかな午後の音を奏でる。店内には穏やかな曲調のクラシックが流れていた。

YUKAWAの店内には古風なつくりの喫茶店が併設されており、買ったケーキは持ち帰ってもよいし、ここで食べてもよいことになっている。ただ、店内でいただく店長こだわりの紅茶がタダで付いてくるので、大抵の客は持ち帰らずにここで食べていく。そのためか、十時の開店時間から十九時の閉店時間まで喫茶店のスペースには人が絶えない。時間帯ごとに客層は異なる。午前中や小学校が終わるくらいまでは主婦がメインだが、部活帰りのこの時間帯に來るとお客は中学生か高校生がほとんどだ。

「あれって、同じクラスのこと……」

滴がまだショーケースの中のケーキを一つずつ指さしながら神様の言う通りをやっている間に、千咲ちさきは喫茶店の窓際の端っこの席に見覚えのある人影を見つけていた。

そこには猫毛ねこげっぽいセミロングの黒髪を手櫛すで梳すいている猫目の少女が座っていた。千咲たちと同じ制服を着ている。右手で髪を梳すきながら、左手では見慣れない情報端末を操

作しているようだ。

「あー、桜井梢ね。陸上部の」

「そっか、ちよつと声掛けてくるね！」

「あ、ちよつと待って！」

滴しずくが制止するのを聞かずに、千咲ちさきは猫目の少女に近づいて柔らかく声を掛ける。

「こんにちは、同じクラスの桜井さん……だよ。よかったらご一緒してもいいかな」

ここで会ったのも何かの縁だ。あまり話したことはなかったが、千咲はこれを機に仲良くなれたらいいなという気持ちだった。

「……あなた、何のつもり？」

返ってきたのはあまりに冷徹すぎる声だった。穏やかに見えた猫目の少女の顔が一石投じられた水面に起こる波紋のように歪む。

BGMの曲が終わり、店内に曲と曲の間の静寂が流れる。

「昼の会見を観た後でその態度とは……大した余裕ね。大物なのか単に愚鈍ぐどんなのか」

「え、それってどういう……」

「何にせよ、覚悟しておきなさい。あなたのことを私は絶対に許さない」

梢は千咲の目を強く睨むと、左手の情報端末を上着のポケットにしまい、席から立ち上がる。空のカップと皿が乗ったトレイを持って下膳口げぜんへと去っていく。

入れ替わりに二人分のケーキとカップを乗せたトレイを持った滴が早足でやってくる。「どうしたの？ 何か言われた？」

何を言われたのかを把握するまでに千咲は数瞬する。頭の中が驚きという名の真っ白色で満たされる。

「よくわからないけど……絶対に許さないって言われた」

「桜井梢に何かしたの？」

「いや、ただご一緒してもいいか訊いただけだよ……」

千咲の頭の中を満たしていた驚きが一部の場所を明け渡し、不可解さが空いた場所を埋める。

今日初めて話したわけだから、『絶対に許さない』などと甚はなはだ理不尽なことを言われたのだ。

しかし、不思議とそれは、怒りではなく罪悪感に近いものだった。

店から出てくると、既に日は沈んでいた。空のてっぺんの藍色から地平線の朱色までのグラデーションが映える。マジックアワーというやつだ。

「桜井梢さくらいしげって、普段からああいう子だから気にしない方がいいよ」
ケーキを食べている間も少し上の空だった千咲ちさきを気遣う様に滴しずくが別れ際に声を掛ける。
ぼーっとしていた間にもう分かれ道だ。

「ああいうって？」

「何考えてるかわからないっていうか……。クラスでも浮いてるんだよね。さつきみたいによくわからないこと言ったりすることはあんまりなかったけど」

「そう……。なんだ」

「まあ、あんまり考えすぎない方がいいと思うよ。じゃあまた明日ね！」

うん、といつもより弱々しく頷いて滴と別れる。いつの間にか菱川橋ひしかわのところまで来ていたのだ。

（桜井梢さん……。かあ）

一人とぼとぼと菱川橋を渡りながら、今日初めて話した同級生の顔を思い浮かべてみる。普段の猫目がより吊り上っていた彼女の睨み顔。

（私、何か桜井さんに何か悪いことしたのかなあ）

後ろから聞こえる声に千咲の思考が遮断される。振り返るがそこには人影はない。

「上だよ」

見上げるとそこには、別々の信号機の上に立つ——二人の茶髪の女の子の姿があつた。顔ははつきりとは確認できないがシルエットから判断するに、こちらに視線を注いでいることはわかつた。

知らない相手であつたが、その語気からただならぬ雰囲気を感じ、千咲は肩を強張らせる。辺りには自分と信号機の上の二人しかない。『見つけた』とはきつと自分のことだろう、と千咲は予感する。

この二人、背格好は似ているが、髪の結い方が少し違う。二人ともワンテールなのだが、正面から見ると、左の信号機の上に立っている方は左側に寄せて結っているし、右の信号機の上に立っている方は右側に寄せて結っている。

「お嬢ちゃん、黄昏時たそがれじきって……知っているかい？」

二人の顔を交互に見比べている千咲に対し、右テールが問いかける。千咲の予感は的中したようだ。

「元々は『誰たそ彼かれ』という言葉から来ているらしいんだが、相手の顔が暗くてよくわからないから『あなたはだれ？』と訊きくような日没後の——ちようど今のような時間帯を言うらしい」

右テールはおさげの回答を待たずに話を続ける。

「この時間帯では顔が見えないのは仕方ないとはいえ、やはり顔を見せて名乗りを上げるのが一応の礼儀だろう」

千咲ちさきに対峙する二人は信号機の上から跳躍すると、膝ひざを軽く曲げ、ふわりと着地する。軽く五メートルはある高さから飛び降りているにも関わらず、二人は平然としている。

「自己紹介をしよう」

右テールが右手の指をパチンと鳴らすと、千咲と彼女との間にある橋の上の街灯が全て同時に灯ともる。その十分な明りでお互いの顔が露あらわになる。

「私の名前は江上えがみかなえ。今回の実験にはレプトンの陽電子ポジトロンとして参加させてもらっている」

名乗りを上げた右テールの右隣へ、少し後ろに立っていた左テールが歩み寄ってくる。

「そしてこっちは江上えがみさなえ。私の双子の妹だ。実験にはレプトンの電子エレクトロンとして参加している」

「……」

左テールのさなえは姉の紹介を受けて、無言のまま軽い会釈をする。

「私の名前は……」

「転校生の陣内じんない千咲だったよな。中等部二年。クラスはC組……だろう？」

一応、礼儀だと思つて名乗り返そうとした千咲の言葉を遮つて、右テールの江上かなえが言い当てる。左テールのかなえもコクンと小さく頷く。うなず

明るくなつたことで新たに分かつたことだが、多少の着こなしの違いはあれど、双子は同じ制服を着ている。

高等部の制服だ。

中等部のセーラー服とデザインは若干似ているが、決定的に違うのはブレザータイプだということだ。前をボタンで留めるようになっており、上着の下にブラウスを着ることになっている。胸当てもその下のリボンタイもない。もつと大人しめなデザインえりもとの襟元につける用のリボンがあるにはあるが、着用するかどうかは自由らしい。この二人は着けていないようだ。

(なにこの人たち怖い！ ストーカーなのかな……)

しかし、同じ学園とはいえ、中高で校舎が違うわけだし、一学年に千人以上いるのだ。地味なわけではないけれど、特に目立つタイプではないと自負している千咲は、相手が一方的に知っているという事実_{じつじ}に若干たじろぐ。

「……ストーカーじゃあない。お嬢ちゃんは十一月という時期外れの転校生という珍しい属性を持っているじゃないか。多少有名でも不思議ではないだろう？」

(心が読まれているだなんて……。ストーカーの上にエスパーさんなのかな……。?)

「だからステーキじゃあないと言ってるだろう！ それにエスパーでもない！」

（どうしよう！ 一一〇番した方がいいのかな？ 助けておまわりさーん！）

「だからステーキじゃあない！ 一一〇番するな！」

（また読まれた！）

「読んでいない！ お嬢ちゃんの思考がお嬢ちゃんの口から余すところなくダダ漏れなだけだろう！」

（え……？）

口に手を当ててあたふたする千咲。

（今日の夕飯はハンバーグです）

「そうか、私は合挽ではなく牛肉一〇〇%がいいな。和風ソースだとなお良い」

（残念、合挽肉あいびきだしデミソースです）

「そうか、それは残念だ」

（ステーキさーん）

「ステーキじゃない」

（スツスツスツスツスツスステーキさーん）

「スツスツスツスツスツスステーキじゃない」

「……ふう」

「モノローグで遊ぶな！」

そういえば、初対面の相手に対して緊張しているときに限って周りの人から『考えていることがそのまま口に出ている』と昔から言われていたことを思い出した。まだ小学生だった頃、父親の同僚のおじさんが家に遊びに来たときに髭ひげがカッコいいなあと思っていたら、何故かそのおじさんから後で小遣いをもらったことがあった。あれは何年生のころだったかな？

「……閑話休題だ」

小さく咳払いをすると、かなえは仕切り直す。

「私たちがお嬢ちゃんのことを知っている理由なんて、簡単だろう……？」

点いている街灯の明かりが全部、心なしか少しだけ暗くなる。一つ一つの明かりの変化は小さくとも、その重ね合わせで辺りが暗くなり、一度は緩ゆるまった場の雰囲気ふんいきが再び張りつめる。

突如。双子はその前身から強い光を放つ。

街灯よりも真つ白な、強い光。

「私たちが同じ『実験』の被験者——魔法少女だからだよ」

光が引いていくのが^{まぶた}瞼越しにも分かる。あまりの眩しさに^{とっさ}咄嗟に目を^{つむ}瞑ってしまった千咲がゆつくりと目を開けると、そこに立っていたのは、高校の制服を着た二人ではなかった。

「お嬢ちゃんは、私たちの^{ターゲット}標的だ」

変身を遂げた二人が不敵な笑みを浮かべる。

気が付くと^{たそがれどき}黄昏時も終わりに近くなっている。空の藍色の部分がぐんぐんと伸びて、残り少ない朱色の部分を侵食していく。同じ意味の言葉ではあるけれども、黄昏時と言うよりは^{おうまがじき}逢魔時と言う方が現状には合っているだろうか。

千咲を取り巻く世界を支配する色が、^{あか}紅から^{あお}蒼へ変わる。

変身直後、トレードマークの右テールがわずかにスカイブルーに染まったかなえは、胸の前に右手を突き出した。右手が力むと、何か円の形をした模様のようなものが右手の前に浮かび、その中に強く輝く青白い光の^{たま}珠が生まれる。

千咲には理屈はわからない。目の前の双子が一瞬で早着替えできた理屈も、人間が光の珠を生み出せる理屈も、そしてその光の珠はなんとなく危ないと自分が直感する理屈も全てだ。

だが、直感が千咲に告げる。あれは危ないものだ。

光の珠が次第に大きくなる。ソフトボール程度の大きさになったところで、

「まずは小手調べといこうか」

かなえの手から放たれ、千咲の方へ向けて真っ直ぐ発射される。

「えっ、」

千咲が咄嗟とっさに左へ跳ぶと、先ほどまで千咲が立っていた位置の道路のアスファルトが光の珠に貫かれて大きく抉えぐられた。抉られた部分が、黒煙とアスファルト独特の異臭を放っている。着弾点付近を見ると、そこには直径にして十センチ弱の大きな穴がポツカリとキレイに開いていた。切り口はキレイな歪みのない円になっている。

抉られた、というよりは『消し飛んだ』という表現の方が正しいかもしれない。

千咲の顔から血の気が引く。顔面蒼白。健全な精神状態の象徴たる紅がその座を蒼に明け渡す。

「よく避けたな。だが、次はもつと速い」

かなえがゆつくりとした動きで次弾を構えようとする。

「……どうして変身しない？」

「変身って？」

「この期に及んで白を切るつもりか？ 『実験』は既に始まっているのだぞ？」

急襲者の右手に再び万物を滅する光球が装填そうてんされる。

(これはもうあれだよね……)

千咲ちみぎは心を決める。たとえ目の前に正体不明の困難があつたとて、己の無力さを嘆き、状況の改善を諦め、地面にへたり込むような腑ふ抜けではない、と自負している。

「逃げの一手だよね！」

踵を返し、千咲は電灯のついていない暗がりの方へと駆け出す。

まずは橋を渡り切ろう。

現状で自分の身を守ることができるのは自分しかいない。

「ふっ、果たして逃げ切られるだろうか……？」

かなえは出しかけた光の珠を引っ込める。だが、二人は逃げ惑う千咲の後ろ姿を傍観ぼうかんし、その場からすぐには動き出さない。



(ど、どうしてこんなことに……！)

千咲は一旦身を隠せるところを目指して全力で駆け抜ける。水泳部ではあるけれども、走りには自信があるのだ。小学校の運動会では、かけっこで負けたことがなかった。

菱川橋をなんとか渡り切り、路地裏へ入る。なんとかあの二人を撒いて自分の家へ逃げ込むのだ。交番という選択肢にもあるにはあるが、警官がパトロール中で不在だった場合にはどうしようもない。見通しの良い場所にある、という一見すると純粋なメリットに思われる点も、致命的なデメリットと化してしまっていた。

当然のことだが、路地裏は複雑に入り組んでいる。とりあえず、大通りに出ずに自宅に近づいていくことを目的として闇雲に進む。

左へ右へ……右へ左へ……。

ある程度進んでから、電柱の陰に身を潜める。千咲は肩で息をしまっていた。ここまでずっと全力疾走だったし、何より部活終わりの疲弊した身だ。肺活量に定評のある水泳部員とは言え、疲労には敵わない。

(少し休もう……)

息を整える。肩の上下の周期が長くなり、やがてその振れ幅も小さくなる。最後に一つ、大きい深呼吸をすると、平静とまではいかないまでも、千咲は思考を巡らすことのできる状態を取り戻す。

起こったことを整理しよう。

双子は『実験』の被験者であるといい、自分たちのことを『魔法少女』と呼んだ。『魔法少女』についてはさっておき、昼間の会見で、実験は被験者同士で行われるものだと言っ

ていた。一般人は巻き込まない、と。

だが、双子は千咲ちさきのことを狙っている。事実、千咲が標的ターゲットだと断言した。

一般人を巻き込まないという政府の会見が嘘なのだろうか？ だが、標的だと言うくらいだから、巻き込む巻き込まないのレベルではなく、明らかに当事者ということになる。

(となるとやっぱり……)

考えたくもないが、千咲はある可能性を思いつく。

自分も『実験』の被験者だという可能性。

しかし、これも会見とは矛盾する。『被験者とその家族には事前に了承を得ている』と言っていたはずだ。頭がこんがらがってきた。

呼吸の乱れは完全に消えた。ともかく逃げるのが先決だ、と思い直して、千咲は再び走り始める――。

「落ち着いたかい？ では再開してもよいだらうか？」

声の主はいつの間にか後ろにいる。振り返るとつい先ほど江上えがみかなえと名乗った魔法少女が目の前に佇み、わずかに嘲笑を含んだ怪訝けげんそうな顔を千咲へ向けている。

「もう追いつかれた!」

回れ右をして先に進もうとするも、そこにはその双子の妹・江上さなえが仁王立ちしていた。

「……」

姉が明るいスカイブルーなのに対して、さなえの髪は藍色に近いウルトラマリンブルーに変色している。姉が明なら妹は暗。その暗さと無口さがこの先に拡がる光も音もない暗黒を表しているかのようにだった。

要するに挟み撃ち。

狭い路地においては、要するに八方塞がり^{はっぽうふさぎ}。

「鬼ごっこはもうおしまいでよいか?」

かなえは右手を突き出して宣告する。先程と同じ構えだ。対照的に、さなえは左手を前へ突き出す。髪の毛のワントールの位置も相まって、まるで合わせ鏡のような状況が作り出される。

「終わらせよう。さらばである」

かなえは青白い光の珠を。さなえは青黒い光の珠を。それぞれが突き出した手の前に作り出し、徐々に膨れ^{ふく}上がっていく。大きさは先程と大して変わらないが、光の明るさというか強さのようなものは全く別格のもののように感じられる。橋の上での一撃はただの威

嚇であり、これからの一撃はそれとは比べ物にならないほど強いものになるだろうと直感される。

一旦は落ち着いた千咲の動悸が激しくなる。あの光の珠をまともに受ければどうなるのかは想像するに易くないが、回避できそうにもないこととただでは済まないということは予測できる。

逃げ場を失い、万策尽きた千咲は目を強く閉じ、現実を見据えることをやめようとする。理不尽さに対する怒りは拭い去れないけれども、それに勝る圧倒的絶望が心の隙間に入り込もうとしている。

(もう……駄目……!)

「鬼が二人で、子が一人……鬼ごっことして、それはどうだろうな」

「誰だ!？」

千咲でもかなえでも（おそろくさなえでも）ない全く別の声がかねえの後ろの暗がりから響き、かなえは咄嗟にその音源の方へ光弾の照準を移す。

その光の照らす先には、一人の金髪碧眼の少女が左手を腰に当て、崩した姿勢で立っている。

「あたしの名前は悠木初^{ゆうきうい}。『実験』でのフレーザーは『uクオーク』だ」
初と名乗った少女は静かに佇^{たたく}む。光弾を向けられてなお、平静^{へいせい}のようである。
「そちらは『陽電子』^{ポジトロン}の江上^{えがみ}かなえと『電子』^{エレクトロン}の江上さなえ。チーム『擬原子』^{ポジットロニウム}の二人だな？」
かなえもさなえも、挙げていた腕を降ろし、光弾の大きさを徐々にフェードアウトさせていく。

「悠木……朝永研究所の悠木か……目的はなんだ？」

「そこにいる少女、陣内千咲の保護だ。その子はイレギュラー。今回の実験や魔法少女の能力のことについて何も知らない。まずはうちの研究所で指導をしなければならぬ」

「この子は私たちの獲物だ。簡単には渡せないな」

「ならば実行使だな」

「私たちと一戦交えようと言うのか？」

「必要ならばそれも厭わない。研究所の命令だからな。だが、今日は『実験』の開始初日だ。穏便に済ませたいと思っている」

「一人でノコノコやってきて、それで交渉になると思うのだろうか？」

かなえは不敵に笑う。自分たちは二人、相手は一人だ。気配なく現れた悠木初と名乗るこの相手の力量は予測できないが、数では自分たちの方が上だ。

「いつ一人だなんて言ったかな？」

「……！」

さなえも不意に振り返る。

初^{うい}とどこか似た声の、しかし初^{うい}の声から語気の強さを奪って柔らかくしたような声の主が今度はさなえの後ろから現れる。初と同じ金髪碧眼^{へきがん}で顔もよく似ているが、メガネを掛けている少女がそこには居た。

「ぼくは悠木海^{ゆうきうみ}。初姉さんと同じく『アップ^{アップ}オーク』だよ」

「朝永研究所の悠木姉妹か……」

これで数は一緒か、とかなえは無意識に一步退いて身構える。こうなると自分たちと相手の力量次第である。

「あら、数は同じではないわよ？」

初^{うい}のやや低めで男勝りな印象を受ける声や海の大人しげな声とは対照的に、育ちのよく、穏やかな、ハープのような女性の声が海の後ろで奏でられる。海の方へ歩み寄ったその声の主は千咲以外のその場にいる四人と同じ年くらいの黒髪ロングヘアの少女であった。背格好は同じ年ぐらいだが、雰囲気や物腰^{ものごし}だけは二つ三つは大人びている。

「はじめまして。二人と同じ朝永研究所の香住楓^{かすみかえで}と申します。『実験』でのフレーバーは『dクオーク』ですわ」

「アップクオークが二人にダウンクオークが一人……やはり朝永研究所で結成されたのは

チーム『陽子』^{プロトン}だったか」

楓の登場によつてかなえは何かになん得する。

「いいだろう。今日は一旦退こう」

数で逆転されている。三人の登場に若干の動揺^{どうよう}の色を隠せないかなえではあったが、声色はあくまで落ち着かせる。態度で引けを取つてはいけないのだ。

「だが、明日からは容赦しない。覚悟しておくのである」

路地裏から鋭く跳躍して隣家の屋根の上に乗り上げた江上^{えがみ}姉妹は、街灯も家の明かりも灯つていない暗がりの方へと吸い込まれていった。



突如現れた三人の少女たちによつて危機を救われた千咲は、三人の所属する研究所で保護されることになった。

朝永研究所。

この名前には聞き覚えがあつた。昼間の記者会見で気だるそうに話していた髭^{ひげ}オヤジはその所長だと言つていた。そして何より、千咲の母親は昔この研究所で研究員をやつていたことがあるということを知り、前日に父親から聞かされていたのだ。もしかしたら、当時の母

親の知り合いがいるかもしれない。

千咲には一度も行った記憶はないのだが、なんだか縁もゆかりもない場所には思えなかつたので、疑いもせずに着いてきてしまったのであった。

正味な話、かなえは『明日からは容赦しない』と最後に言い残していた。つまり、明日以降も似たようなことに巻き込まれるかもしれない。明日からの人生を生き抜いていくためには今回の事の顛末について知っておかなければならない。研究所に来れば、それについての説明もしてくれるとのことだったので、着いていく他に選択肢がなかったのは事実だ。

研究所に着くまでに簡単な自己紹介を済ませ、軽く親交を深める程度の会話を二三交わした。

三人とも同じ湯川学園の高等部に在籍していること。初と楓は二年A組、海は二年B組。三人とも幼馴染で、朝永研には小学生の頃から放課後に通っているということ。

千咲の母親にももちろん会ったことがあるということ。

母親についてはもう少し掘り下げたいと思う千咲だったが、研究所に着いてしまったので『時間切れ』と言われてしまった。

閑話休題。

本題については機密事項も多いという理由で、研究所についてから説明が始まる。

研究所は地上五階建ての、敷地面積だけで二千平米はあるだろう大きなビルだ。千咲は建物に入つてすぐのところにある一階の応接室に通された。

応接室に入り、ベージュのふんわりとしたソファアールに三人が適当に座るので、千咲は残つた場所にちよこんと座る。

千咲がソファアールに座るや否や、備え付けの黒電話が鳴る。

「もしもし。……あ、はい。わかりました」

一番近くに居たインテリ眼鏡つ子・悠木海ゆうきが電話に出て応対する。

「二十一世紀の今日日、黒電話ですか……」

率直な感想を述べる千咲。

「な、やつぱりそう思うよな！ これ、うちの研究所の所長の趣味なんだよ。郷愁ノスタルジーにもほどがあるよな」

「……言いくいですが、はい」

「あらそう？ 私はハイカラで素敵だと思うのだけど……」

楓は幾分変わった趣味をしているのかもしれない。

「所長、会議が長引いてるから少し遅れるってさ」

受話器を降ろした海が電話の内容について簡潔に要点だけ報告する。

「では、先に始めていきましょうか」

「そうだな。さて、どこから話そうか……」

男勝りな女子高生・悠木初は話の支点をどこに置くか決めかねていた。

「まず、『魔法少女』と『実験』について説明するべきじゃないかしら」

深窓の令嬢・香住楓がその悩みに一つの答えを与える。

「そうだな。千咲は昼の記者会見を観たか？」

「はい、一応……」

「今回の『実験』は昼の会見で言っていた通り、素粒子実験を仮想的に行うというものだ。被験者を素粒子に見立ててその反応を観測する」

「素粒子に見立てて、ですか」

千咲は要領を得ない様子で相槌を打つ。

湯川学園がいくら理科教育の進んだ場所だとは言えど、素粒子物理の理論について学ぶのは高等部に入ってからだ。

それでも周りに比べたら十分早いのだが。湯川市外であれば大学三年か四年くらいで勉強する内容である。

海が千咲の様子を察してツツコミを入れる。

「姉さん、うちのカリキュラムだと、中等部では素粒子理論についてまだ勉強していないはずだよ」

「そうだったか。うーん、どこから説明したものか、やはり悩ましいな……」

「それなら、私が代わりに説明しましょうか？」

説明役を買って出たのは楓だ。

「そうだな、こういうのは楓が一番得意だろ。頼んだぞ、生徒会長さん」

「了解したわ」

楓はニツコリと微笑む。

最初に楓を見た時、『なんとなくどこかで見た覚えがあるな』と思っていた千咲だったが、ここで合点がいった。楓は高等部の現生徒会長だったのだ。

黒髪、ストレート、ロングヘア、柔らかい物腰、気品に溢れる^{あふ}佇まい、^{たたく}優しさの^{ほとぼし}迸る笑顔、名実ともにお譲様……。

その容姿と性格から、性別・学年を問わず人気がある人なのだと噂で聞いたことがあった。ファンクラブもあるほどなのだとか。

中等部の千咲からすれば、高等部の生徒会長を生で見かける機会はあまり無い。とあるクラスの友人が写真を持っていて、それを見せてもらったことはあったのだが、実際に見るのは初めてだった。

そういえば初等部に妹がいるらしいという噂もあった。

「じゃあ、ぼくはお茶を淹^いれてこようかな」

海が気を利かせて立ち上がる。

「あたし番茶ばんちゃな」

「はいはい。楓かえではハーブティーでいいんだよね」

「ありがとう、お願いするわ」

「千咲ちさきちゃんは何がいい？ 紅茶にコーヒー、梅混布茶うめこぶなんかもあるけど」

「それじゃあ、紅茶をお願いします」

「おっけー」

たった今四人が入ってきたドアから海が出て行った。お茶汲み場は他所にあるようだ。

「では、説明させていただこうかしら。初ういも、説明中に指摘するところがあつたら遠慮なく言つてね」

「あいよー」

「千咲ちゃんも分からないところがあつたら、その場で訊いてね」

「は、はい」

これはファンクラブができる理由もわかる。女の子の憧れを凝縮したような人だ。

彼女のニッコリ笑顔はまさしく女神の微笑だ。咄嗟とつさにそう思った千咲は返答ひとつするの

に緊張して噛みそうになつてしまった。『この世界にある物質は、全て『素粒子そりゅうし』と言われる小さな粒子から出来ています。『素

粒子』がたくさん集まって私たち人間やお花、お琴や絵具が構成されているわけね」
「なんだが喩えがお嬢様っぽくて少し感心してしまう千咲。」

「実は世界には二種類の素粒子があるの。千咲ちゃんも耳にしたことないかしら？」
「ええと、『フェルミオン』と『ボソン』……でしたっけ？」

「大正解。素晴らしいわ」

ここで女神の微笑に加えての頭撫で撫で。完全に持つて行かれた。心を。
妹がいるなのか、年下の扱いにも慣れてるようだ。

千咲は『昔、お母さんに褒められてた時こんな感じだったなー』などと思いつきながら、
なんとも言えない脳の血管の弛緩の心地よさに酔いしれる。

「『フェルミオン』と『ボソン』にもいろいろ種類があるのだけれど、まあそれは追々話
すことにして……一番小さいフェルミオンとボソンについてお話ししよう」

ここで少し間を置く楓。少し思案しているようだ。うまい譬えを出せるかどうか、聞
き手の理解度に大きく影響することをよく理解している楓は安易に変な例を出してしまわ
ないよう普段から肝に銘じている。

「今現在、標準とされている素粒子物理の理論は『標準理論』と呼ばれるものなのだけ
——」
「標準になっている理論……そのまんまですわね」

「確かにそうね」

クスリツと小さく笑ってから楓は続ける。かえて

「標準理論では、物質を構成する粒子は『フェルミオン』だとされているわ。そして私たちがお互いにご挨拶したり、お友達とおしゃべりしたり、プレゼントを交換したりするのと同じように、『フェルミオン』たちも互いに作用しあう、つまり相互作用をするわけね」
ドアの開く音がする。

海が四人分のカップを銀のトレイの上に載せて戻ってきた。各人の前にカップを置いていく。

最後に楓がお礼を言ってカップを受け取ると、ハーブティーを一口、口に含んでから話を続ける。

「フェルミオン同士の相互作用は『ゲージボソン』と呼ばれる一種のボソンの交換なの」
「ボソンの交換？」

「簡単に言うとキャッチボールね。フェルミオンが人だとすると、『ゲージボソン』はボール。フェルミオンが互いに『ゲージボソン』というボールを投げ合うの」

「どうして、相互作用が『ゲージボソン』の投げ合いなんですか？」

千咲が訊ねると、楓はやはりそこに来たかという様子で顔をしかめる。

「うーん、それについて説明するためには、量子力学りょうしについて説明した上で場の量子化ばの

お話をしなければならぬわね……。ちよつと時間が掛かってしまうから、とりあえず今はそういうものだと思つてもらつてもいいかしら？」

「……わかりました」

楓が顔をしかめた段階で、『これは話の流れを乱してしまつた、まずい』と察知した千咲はすぐに引き下がる。今は必要なことなのだろうし、後で時間があるときに説明してもらおう。人並みに空気の読める千咲ちゃんなのだ。

「ひとまず話を続けるわね。フェルミオン同士は『ゲージボソン』を交換することで相互作用すると、素粒子の反応が起こるの。ゴムボールのキャッチボールだったら、あまりお互いに影響はないと思うけど……何かいい例はないかしら？」

困つた様子で周りを見渡した楓に初が助け舟を出す。

「任せろ。例えば、ものすごくガタイのいい男が居て、その人がロードローラーを持ちあげてごく普通の人に投げつけるとするだろ？」

いきなり悲惨な結末が待っていきなり例をいきなり挙げられて驚く千咲。まるで昔読んだ漫画に出てくる吸血鬼のようなガタイのよさだな、と心の中で思う。

「ロードローラーをぶつけられた人はやっぱり体ごと弾き飛ばされちまう。下手したら身体が押しつぶされちまうかもしれない」

押しつぶされる瞬間に外へ抜け出て、仁王立ちしている詰襟の男の図が思い浮かんで

すぐに消える。

「こういう風にボールを投げる側や受け取る側に何かしらの変化——つまり、反応が起こるんだ。ゴムボールの時みたいに運動量が小さいものを交換しても反応は小さいんだが、ロードローラーの時のように運動量の大きいものを交換すると大きな反応が現れる」

「もしかして、その反応を観測することが、その『実験』って目的だってことですか？」
「その通り。千咲ちゃんは優秀な生徒さんね」

「またもや女神の微笑&楓撫なで撫でだ。前頭葉にジワーツと心地よい弛緩しかんが広がる。

これは癖になりそう。楓が担任の先生だったらクラスのテストの成績は鰻登りだろうな、などとあり得ない想像に胸を膨らませる千咲。

「被験者をフェルミオンに見立てて反応の様子が『標準理論』ひょうじゆんりろんの予言と一致するかどうかを確認のが今回の『実験』の目的なの」

「まあ一応、『標準理論』では予言されてない反応が起こるかもしれないっていう甘い期待はあるけどな」

楓のまともに初が補足する。

被験者が『フェルミオン』——物質を構成する素粒子だとすると……

「じゃあキャッチボールに使うボール——『ゲージボソン』には何を使うんですか？」
まさか本当にロードローラーを使うわけじゃないよね……などと千咲が考えていると、

残りの三人がしばらく『あんたが言いなさいよ』的なアイコンタクトによる擦り付け合いをした後、海うみがおずおずと答える。

「……『魔法』だよ」

……。

開いた口が塞がらない、とはまさに今の自分のこのような状況を言うのだろう。千咲ちさきはまた一つ尊い経験を積む。ビバ実験。

素粒子『物理学』の『実験』なのに、魔法ときたもんだ。千咲は確かに年齢上、中学二年生——中二だが、付いていけるものと付いていけないものがある、と思う。

予想されてはいたが、この静寂の訪れをすぐに破るべく、二の句が継げない千咲に向かって、海が続ける。

「た、確かに『中高生にもなって魔法だつてさブークスクス』って思つて引くかもしれないけど……君もさつき見たよね。江上えがみ姉妹が『光の魔法』を使っているところ」

江上姉妹と言われてついさつきまで感じていた戦慄を思い出し、千咲の表情が氷つく。アスファルトに風穴を空けたあの光の弾丸は、間違いなく侮つてはいけな代物だった。

「あれは電磁相互作用でんじそうごさようを司るゲージボソン——『光子フォトン』を生み出す『光の魔法』だよ」

あの光の弾丸は『光子』と呼ばれるものらしい。

「別に電磁相互作用自体は怖いものってわけじゃないさ」

電磁相互作用は人間にとって最も身近な相互作用であり、太陽からの光も、私たちの生活を助けてくれる電化製品も、秋口に頻発する雷も、冬にピリリと感じるあの忌々しい静電気もみな全て電磁相互作用のおかげなのだ、と海は補足する。

「あの路地裏、暗くなってるのに周りの電灯が全く付いてなかったでしょ？ あれはあの二人が『光の魔法』で電灯を消していたからなんだ」

そういえば、ひしかわ菱川橋の上で電灯の明るさが変化していた気がするが、あれもあの双子の仕業なのだろうか。

「色んな使い方があるんだよ。ただ、レーザー兵器みたいな使い方をするとあの光の珠の感じになるのかな、と思うけど」

「まあ要するにあれだ。あたしらが魔法を使って街中でドンパチやる。それでどんな反応が出るか観る……ってのが『実験』よ」

痺れを切らした初が一言でまとめる。

「そうね。私たち被験者は女の子しか選ばれていないみたいだし、『魔法』を使って戦っているから研究者たちの間では『魔法少女』と呼ばれているわ」

「かなり中二くさいがその呼び方が定着しきってるから、あたしらもこの呼び方を使って

る……と、これで『実験』と『魔法少女』についての説明は終わりだな」

「ここまでで何か質問はあるかしら」

楓が千咲の顔を覗き込む。一番訊きたくないことだが、これを訊ねずにはいられない。可能ならば、『そうではない』とか『違う』とか、そういった否定の言葉が欲しい。

「まさか、私もその……『魔法少女』ってことはないですよ」

「そのまさかよ」

的中してしまった。圧倒的嫌な予感。江上姉妹から言っていた『お嬢ちゃんは私たちの標的だ』の意味をやつとここで理解する。

つまり、千咲は魔法少女としてこの『実験』に参加させられて、見知らぬ相手とドンパチしなければならぬということだろう。

昼の記者会見では、致命傷を受けたり、その後遺症が残ったりすることは無いと言っていたが、正直その真偽は怪しい。

道路に穴が空くほどの光弾を使ってなお、かなえは『小手調べ』と言った。つまり、本気は出していないということだ。

より強い魔法をまだ隠し持っていると考えていいだろう。そんな調子で身の安全が保障されるものだろうか。

「あの、それって『実験』中に死んだりしてしまっくんじゃ……?」

「それに関しては、俺が説明しよう」

応接室のドアをノックなしに開いて入場してきたのは、昼間の会見に出ていたヒゲ中年だ。

「やあ、陣内千咲君。俺は朝永真一ともながしんいち。この研究所の所長だ」

「は、はじめまして」

「あー、厳密にははじめましてではないんだが……まあいいか、はじめまして」
千咲が挨拶すると、左手で後頭部をポリポリと掻かきながら真一は答える。

「早かったね、所長」

「おう、海うみ。俺にも番茶ばんちやくれ」

「いいよ、ちよつと待っててね」

海はいそいそとまたお茶汲み場へ出て行った。

「なんだオッサン、もう会議はいいのか」

「そのオッサンっていうのやめる、初ついで。俺はまだ三十九だ」

「それで所長、今回の件の処分は決まったのかしら？」

「ああ、とりあえずあちらさんには御咎とがめ無しだそうだ。実害はないからだだよ。一応、声明は出した後だったし、向こう側もボソソチームの癖に紳士的だったみたいだからな」
「私たちが千咲ちゃんちんの存在に気づいたのもついさっきのことだものね」

会議の内容について楓が確認を取る。おそらく千咲を襲った江上姉妹の処遇についてだろう、と千咲はアタリをつける。

この『実験』は様々な研究所が合同して行っていると昼間の会見では言っていた。初たちはこの朝永研究所に所属している、ということは江上姉妹もまた別の研究所に所属しているのだろう。

「まず『実験』中の身の安全についてだが、これは一切問題ない。私は事の顛末をこの目で観ていないのだが、江上姉妹は君の目の前で変身した、そうだな？」

どこから聞きつけたのか。千咲がまだ初たちにも話していないことを真一は言い当てる。

「はい」

「その変身がミソだ。変身していない状態では確かに危ないんだが、変身後は体が何倍も頑丈になるから、多少の衝撃ではビクともしない。確かに擦り傷程度はするかもしれないし、ちよつとは痛いかもしれないけどな」

「はあ」

目の前を掠めるように銃弾を撃ち込まれてその威力をまざまざと見せつけられた後に、『この防弾チョッキを着れば大丈夫！』と言われているようなものだ。そう言われても納得はいかない。

「では一般の人——君の家族や友達に影響はないのか。これも問題ない」

「どうしてですか？」

「素粒子そりゆうしの相互作用が成立するのには、相互作用する素粒子が両方とも『電荷でんか』を持つていなければいけねんだ」

「さつきキャッチボールの例を出したじゃない？」

「ここで先ほど相互作用について説明してくれた楓おもむろが徐おもむろに口を挟む。

『電荷』つていうのはキャッチボールに使うグローブみたいなものよ。グローブを着けている人同士しかキャッチボール出来ないでしょう？」

「つまり、一般の人はそもそもグローブを持っていないから影響を受けないということですか？」

「その通り。千咲ちゃんが賢くて助かるわ」

「またもや楓な撫なで撫なで。楓も本気で感心しているようで撫なで方に余念がないようである。先ほどよりもさらに気持ちいい撫なで撫なでだった。

「とは言われても実際に見てみないと納得行かないだろう。初、頼む」

「あいよー」

呼ばれた初は待つてましたとばかりに右手と左手の人差指を真上に突きだして、その先端に光の玉を作る。かなえが作っていたものよりかはかなり小さい。これはピンポン玉かゴルフボールくらいのサイズだ。

「アスファルトとかコンクリートとか、物質は何故か反応するんだけどな。ちゃんと魔法少女以外の人間には反応しないようになってるんだよ。不思議だよな」

初はまず左手の人差指の先に作った光の玉を飛ばして、テーブルの上の灰皿に当てる。当たった瞬間、それとほぼ同じ大きさの穴が灰皿にポツカリと空く。

「種も仕掛けもないよ。強いて言うなら魔法だ」

「あ、お前！ 俺の灰皿になんてことしてくれてんだ！」

「うるさいオツサン。ここに灰皿持ち込むなって言っただろ。どうせここで話しながら一本吸うつもりだったくせに」

「いいじゃねえか！ 所長室も会議室も全面禁煙になって俺の憩いの場はここしかねえんだよ！」

「ここはもともと禁煙だ」

「家でも吸わせてもらえない俺に何処で一服を楽しめってた！ こないだなんかお前の姉にベランダでさえダメだと言われたぞ！」

「おうおう、むしろこれを機に辞めてみたらいいじゃん。さすが我らが長姉。良いこと言うねえ」

全くこいつと言いつと嫁と言いつ娘と言いつ、嫌煙家は喫煙者に厳しいぜ……など真一がブツクサ言いだした。しかし、一研究所の所長が女子高生にタメ口で喫煙を注意されているとは

……なかなか凄いな。

「まあいい。話を続けよう。初」

初が呼びかけに応じる。残った右手の人差指の上の光の玉を真一へ向けて飛ばす。その行動に千咲は思わず息を呑む。

しかし、光の玉は真一の胸に風穴を空けるところか、真一の身体に衝突するや否や、何の痕跡も残さずきれいさっぱり消滅してしまっていた。

「この通り、魔法少女以外の人体や人体に触れているものに近づくと消滅するようにちやあんとできてんだ。だから安心してくれ」

百聞は一見に如かず。千咲は不安要素が一つ消えて安堵する。

父親や友人の滴たちが近くにいるときに『実験』が始まって、巻き込まれて怪我をしてしまうことはないのだ。

「魔法少女に当たった時にどうなるか……つてのは実際に初たちが戦っているのを見てもらうしかないがな。その機会はすぐにでもやってくるだろう」

……チリリリリリーン。

「ほらな」

初が黒電話の受話器を取る。

「もしもし。……ああ、わかった」

受話器を置くと、初は肩を強張らせて、どこか緊張したような、それでいて頬を少しだけ朱に染めて、どこか高揚したような様子で電話の内容を伝える。

「『擬原子』から宣戦布告があった。明日十七時。菱川橋にて待つ、だだよ」
それを聞いた千咲は言葉を失い、海、楓は顔を引き締めてから頷き合い、真一は大胆不敵な笑みを浮かべる。

最初の正式な『実験』の日時は十一月十二日の十七時ということになっていた。今は十五時半の十分前。ちょうど高等部の授業が終わる時間だ。

天候はあまり宜しくない。今にもひと雨来そうな様子だ。空全体が雲に覆われて暗くなっている。空模様から今が昼の何時かなんて予想はつかないだろう。

昨日の夜は安全の為、四人とも研究所から真一の車で送ってもらったのだが、朝の登校の時は一切お構い無しだった。

『実験』にはいろいろ規則があつて、その中に『実験は放課後にのみ行うこと。朝方や授業中、昼休みの時間はこれを固く禁ず』というものがあるらしく、登校時は問題ないだろうという見解だった。学生生活には一応の配慮がなされているらしい。

昨日、帰宅する車の中で千咲が真一から言われたのは『明日は十五時半に校門に集合』
『実験前にもう少し説明することがある』『実験の様子を見学してから実験に参加するか
否かを決めてほしい』の三つだ。

部活を理由に断ろうとしたら、『明日は御国の都合で部活中止の予定だ』の一点張りだった。そんな手前勝手に部活がなくなるものかと思っていたが、翌日の朝来てみればHRで部活動中止のお知らせ。恐るべし国家権力。事情を何も知らない滴は泳げないしずくことに悶え苦しんでいた。滴は名前の通り、水に浸かっているといないとダメな子なのだ。

結局、部活もないので校門の外で初たちを待つことになった。朝永研究所は学園内部にあるのだが、中等部や高等部とは反対側にあるので、一旦校門に戻って来てから真一の車で直接移動する手筈になっていた。

校門のところに背を預けながら、千咲は車の中で楓が補足していたことについて反芻する。

正直、身を危険にさらすのは躊躇ためらわれる。だが、危ないだけでデメリットしかないようなこの実験にもちゃんとメリットは存在していた。

『最も優れた成果を挙げた魔法少女は、ご褒美としてどんな願いも一つだけ叶えてもらえる——』

そういう国の裏声明があるらしいのだ。

それも実は昨日の昼の放送で副音声をつけていれば聴けるものだったらしい。まさか記者会見に副音声が付いているとは誰も思うまい。研究所のメンバーでなければ内容がほとんどわからないように暗号化されていたらしいし、今となつては確認のしようもないのだが。

どこまで本当なのかはわからない。『どんな願いでも』とは言うけれど、『世界征服』とか『大統領就任』とか『火星に移住』とかそういうスケールの大きい願いは無理だろう。どれだけ技術大国・日本が頑張ったつて無理なものも土台無理なのだ。

そこまで無茶なものではないが、千咲ちさきにはどうしても取り戻したいものがあつた。

「幼いころの——私がまだ湯川市にいた頃の記憶……」

思わず口に出してしまった千咲は校門に背を預けたまましゃがみ込む。

千咲の母親は、もうこの世にはいない。

湯川市に居た頃は元気だったそうだが、引越してしばらくしてから病床に伏せてしまい、一年足らずでこの世を去ってしまった。

湯川市での記憶がない千咲には、母親とのふれあいの記憶はあまり残っていない。全く覚えていないわけではないけれど、その記憶があれば、もっと母を近くに感じることで

きるのではないかと思ってしまうのも事実だ。

無くてもいいじゃないかと断じられてしまえば、確かにそうかもしれない。

他の人からしたらこれはいわゆる贅沢品ぜいたくの類なのだろうけれど、それ自体を見たこともないのに、千咲にとってはなんだか必需品ひつじゆに思えて仕方が無かったのだ。

湯川市は素粒子研究の街と銘打たれているが、最先端の脳科学の研究をしている研究所もある。そこに行けばあるいは……。

「よっ、千咲」

「あ、こんにちは。みなさん」

「どうしたの？ なんだか浮かない顔をしてるけど」

海がしゃがみ込んでいた千咲の様子を察して問いかける。

「いえ、昨日お話してもらったことについてちよつと頭の中で整理して」

「あら、千咲ちゃん復習にも抜かりがないのね」

女神の微笑いただきました。こんな素敵な笑顔に向けられると、ウジウジ考えているのがバカらしく思えてきてしまう。

生徒会長の微笑を堪能たんのうしたところで、昨日帰りに乗った黒のヴァンが校門の前に乗り付けてきた。

「おう、お前ら。さっそく研究所行くぞ。乗れ」

ぞろぞろと乗り込む一同。楓が助手席に、残りの三人が後部座席に横一列に座る。千咲が真ん中、初が右、海が左だ。

研究所まではあつという間だ。中等部や高等部よりも校門から近いところにあるので、五分とかからず着いてしまう。

昨日と同じ応接室に入ると、昨日と同様に海が各人の希望を訊いてからお茶汲み場へ出ていく。

話を切り出したのは真一だ。

「昨日はザツクリとしか話さなかったが、素粒子の『標準理論』ひょうじゆんりろんについてだ。君たち魔法少女は『標準理論』において物質を構成する粒子——フェルミオンだと説明したな」

「はい」

「実はこのフェルミオンには十二種類のフレーバーという種類がある。この表を見てくれ」

「アイスの種類みたいなもんだな。三十一種類もねえけど」

フレーバーと聞いて千咲が某アイスクリーム屋を思い浮かべているところに、初がちやつかり小ネタを差し込む。

真一は咳払いをしてから、話を続ける。

「十二種類のうち六種類は『クオーク』と呼ばれ、残りの六種類は『レプトン』と呼ばれ

第一世代

第二世代

第三世代

クォーク QUARK

正電荷

アップ

u

チャーム

c

トップ

t

負電荷

ダウン

d

ストレンジ

s

ボトム

b

レプトン LEPTON

負電荷

電子

e

ミューオン

μ

タウオン

τ

電荷なし

電子ニュートリノ

ν_e

ミューニュートリノ

ν_μ

タウニュートリノ

ν_τ

ている粒子だ。クォークにもレプトンにも『世代』というものがあつて第一世代から第三世代まである。一世代につき二種類。合計六種類つてわけだ」

「私たち三人は第一世代の『クォーク』として役目を受けて、この『実験』に参加しているわ。逆に江上姉妹は第一世代の『レプトン』ね」

楓が即座に補足する。

「一世代に二種類のクォーク、二種類のレプトンがある……その二種類の違いつてなんですか？」

「良い質問ね。昨日、素粒子が相互作用をするのには『電荷』が必要だ、という話をしたのを覚えているかしら。電荷には『正』と『負』があるのよ。クーロンの法則は習ったかしら？」

「はい、『同じ符号の電荷を持ったもの同士は斥け合い、違う符号の電荷を持った者同士は引き合う』つてやつですね」

「そう。別に『正』と『負』に善悪とか優劣とかはないのだけれど、なぜかこの世界の電荷には符号があるわけね」

「ぼくと初姉さんは電荷が正で第一世代のクォーク——『uクォーク』で、楓は電荷が負で第一世代のクォーク——『dクォーク』なんだ」

五つのカップを乗せたトレイを両手で持ってお茶汲み場から戻ってきた海が、昨日と同

じ動作でカップを配りながら付け加える。

「ややこしいんだけど、クオークが正電荷と負電荷で分かれているのに対し、レプトンは電荷を持っていないか持っていないかで二種類に分かれているんだ。江上姉妹の無口な方と江上さなえは電荷を持っている方の第一世代のレプトン——『エレクトロン電子』だね」

「ええと、じゃあ江上かなえは？」

「これまたややこしいんだけど、十二種類のフェルミオンにはそれぞれ対になる『反粒子』っていう電荷が正負反対の粒子があつてね。かなえは『電子』の反粒子——『ポジトロン陽電子』なんだよ」

だんだん話が複雑になってきた。海の説明に千咲が首を傾げていると、

「慣れるまでは仕方ないわ。誰だって初めて聞いたときは混乱するものですもの。私だってそうだったわ」

楓がすかさずフオローを入れる。楓先輩もそうだったなら今はとりあえず大丈夫かな——などと好意に甘えてしまう千咲であった。

「そういえば、あの二人のことを『ポジトロニウム擬原子』って呼んでましたよね？」

「あれはチームネームね。私たち魔法少女はツーマンセル、もしくはスリーマンセルで行動することが義務付けられているの。電子と陽電子からなる原子もどきのことを物理学では『擬原子』と呼んでいるから、あの二人はそう呼ばれているわ」

「ちなみにあたしたちは^{アップ}u・^{ダウン}u・dの三つのクオークで構成されているから『陽子』^{プロトン}ってチームネームが付いてる。原子の中に含まれてる根本的な粒子の一つだ」

静かに番茶を啜^{ばんちや}っていた初^{うい}が唐突に話に参加してくる。

「ちなみに、素粒子が何個か集まってできた粒子もフェルミオンかボソンに分類される。んで、フェルミオンには『奇数コ集まるとフェルミオンになり、偶数コ集まるとボソンになる』っていう性質がある。ボソンは何個集まってもボソンだけだな」

「フェルミオンは奇数、ボソンは偶数みたいなものね。奇数を奇数コ足し算すると奇数だけど、偶数コ足し算したら偶数になってしまおうでしょう？」

「なるほど……」

楓^{かえで}の比喩^{ひゆ}はやつぱり分かりやすいな、と千咲^{ちさき}は素直に感心する。

「それゆえにツーマンセルの場合は『ボソンチーム』、スリーマンセルの場合は『フェルミオンチーム』と呼ばれてんだ」

全く、俺のセリフ奪い放題しやがって、と真一^{しんいち}は愚痴^{ぐち}りながら期^{うかが}を窺^{うかが}って口を挟む。研究者とは基本^{きほん}的におしやべりが大好きな生き物だから、邪魔されると少し不機嫌になるのだ。

「まあ、そう拗^すねんなってオツサン。後の説明は全部任せてやるからよ」

初は上から宥^{なだ}め透^すかすようにオツサンに説明を譲る。これではどちらが年上かわからな

い。

「実験では『ボソンチーム』と『フェルミオンチーム』は敵同士になって戦う、という設定になつてる。そうする必然性は全くないんだが、完全に上の偉い人の趣味だな」

真一は少し冷めた番茶をひと息に飲み干すとソファアの背もたれから背を離し、前傾姿勢になる。

「……つてなわけであとは魔法についての解説が必要なんだが、それは実戦を見ながら解説していくことにしよう」

時計を見ると、十六時半くらいを指している。

「行くぞ」

「二はい」

緊張した面持ちで立ち上がる千咲以外の四人。慌てて千咲もそれに続く。

フェルミオンチーム『陽子』^{プロトン}の初陣。

その時は刻々と近付いているのだ。

五人の他にも、実験におけるデータの測定解析のために研究所のスタッフが何人かついてきていた。

車で移動するにも一台では入り切らないので五人が乗る車とスタッフが乗る車に分かれ

て移動した。

現地に到着するや否やスタッフの面々は魔法少女たちに無線の電極のようなものを取り付ける。遠巻きに見ると全く気付かないほど小さなものだ。

初^{うい}たちがスタッフと何がしかを話しながら実験の準備をしている最中、スタッフの一人が『念のため』と言って千^ち咲^{さき}にも電極をつけた。今日は純粹に見学だと言われて来たので、本当の本当に念のためだろう。

こういった準備があるので本来車で十分弱しか掛からない菱^{ひしかわ}川橋にくるのにわざわざ三十分前から出発したのだった。

別に相手方を待たせてはいけないという理由ではない。むしろ朝永研究所は時間にルーズな人が多いところだ。

『陽^{プロトン}子』の三人組が菱川橋の中央まで進むと、『擬^{ポジトロニウム}原子』の二人はすでに待ち構えていた。昨日のように信号機の上に立っているわけではなく、腕組みをして車道の上に威風堂々と立っている。

車道に立つのは危ないのだろうかとかと千咲は思ったが、『実験』を行うという情報がすでに警察署に流れていて交通規制が敷かれている様子だったので、何も問題ないだろう。

橋の向こう側には『擬原子』が所属している研究室の機材車らしき車が停まっていた。「ようやく来たか。待ちくたびれた」

『陽子』の三人が橋の真ん中に着いて、『擬原子』^{ボジトロニウム}の二人と対峙したのは十七時を十分も過ぎたころだった。

「いやー、すまんすまん。道が混んでてさ」

「まあ、いいだろう。さて、昨日の少女はどうしたのだろうか？」

「千咲なら離れたところで見ているよ。あの子はここに戻ってきたばかりでまだ魔法に免疫がない。今日は見学だ。手は出すなよ」

「……」

さなえがコクリと頷く。昨日から相変わらず一言もしゃべらないようだ。

千咲は、というと、菱川橋の袂^{たもと}で真一とともに離れたところから傍観している。

「戦闘領域はこの菱川橋上、およびそこから東西に三十メートルの河川——新川^{しんかわ}の上、そして菱川橋の付け根から半径五メートルの領域のみ。使用魔法は『光の魔法』、これでいいかしら？」

「問題無いだろう。私達は準備万端だ」

楓^{かえで}が実験環境の確認をして、かなえとさなえが同意しながら、身体から煌^{きら}めく閃光を放つ。気づくと既に制服姿から着替えて、昨日と同じ衣裳に身を包んでいた。

「じゃあ始めようか。海^{うみ}、楓、準備はいいか？」

「ぼくはいつでも」

「問題無いわよ」

こちらの三人も身体から閃光を迸らせ、三者三様の衣裳に着替える。真一しんいちが言っていた『身体の強度がグンと増す魔法少女の衣裳』というヤツだ。

「では行くぞ！」

先に動き出したのは『ザ・無口』のさなえだ。昨日去り際に見せたのと同じ鋭い跳躍で一人空中に躍り出て、千咲ちさきたちがいる側とは反対の橋の袂たもと近くの交差点の信号の上に乗る。昨日乗っかっていた信号とは橋を挟んで正反対の位置にある信号機だ。そこから両手の指に作った小さい光弾を出来る限り小さく凝縮して放つ。まさに遠方から狙撃するという構えだ。

両手の指の光弾はいくつか同時に展開できるようで、『陽子』の三人を同時に狙撃する。

「ぬかった！」

「光弾全てが速いし、何より数が多すぎるわ……」

狙撃弾を回避することに集中してしまうと、遠くを意識するあまり、近くが疎おろそかになる。

「かはっ……！」

「私の存在を忘れてもらっては困るだろう！」

注意が散漫になっていた楓かえでの鳩尾へ、かなえの膝蹴りが深々と突き刺さる。インパクトの瞬間に膝の先端が閃光を放っていた。魔法によって強化された膝蹴りだったのだ。

「なんちやってね！」

しかし、楓の方が一枚上手だった。かなえの膝と自分の体の間に咄嗟とつさに右手を割り込ませて防御していたのだ。中空を盛大に舞っていたが、それは威力を殺すためのオーバーリアクションでしかない。空中で一回転して体操選手顔負けの華麗な着地を披露する。

「……！」

着地点を予想していた狙撃手さなえがそこだとばかりに一閃。着地と同時に楓を射抜く。

圧縮されて高い圧力を持った光弾がレーザービームのように空気を押しつけて飛ぶ。

しかし、さなえの渾身こんしんの狙撃弾は二人を繋ぐ直線状に体を割り込ませた海うみが左手に作り出した光の盾によって弾かれる。

「そうは問屋が卸さないよ！」

「よし、反撃行くぞ！」

初が号令を掛ける。今度はこちらが攻める番だ。

『ポジットロニウム擬原子』の二人がそれぞれ近距離での接近戦・遠距離からの援護射撃という風に各々の特性に配慮して役割を分担しているように、『プロトン陽子』の三人にもコンビネーションがある。

まず、初が前に出る。

「近接戦闘なら任せろってんだ！」

男勝りな性格で、昔から男の子と殴り合いのケンカをすることもあつた初ういは近距離での

徒手格闘を得意としている。その点に関してはかなえと同じだろう。

膝蹴りを放つてから着地し、油断していたかなえに急接近し、キレイなワンツーを見舞う。

油断していたとはいえ、脚で戦うかなえはこれをバックステップで躲かわそうとする。

しかし、初の拳ういもまた、かなえの膝と同じように魔法によつて強化されている。力を込めると、拳の軌道の延長線上に光の矢が飛び出し、退いた相手を追撃する。

二発目の右ストレートに力を込めた初の拳から光の矢が放たれ、

「しまつ……」

横に避けるべきだったと気づいた時にはもう遅い。後ろに退いたかなえは結果的に距離を測り間違えた形になり、初の右手一閃を受ける破目になる。

咄嗟に魔力を集中させた両腕をクロスさせて防御態勢を取るが、初の攻撃は重い。橋の欄干のところまで体を弾き飛ばされたかなえは、間一髪のところまで川に落ちずに済むが、膝を地面につけてしまう。ガード越しにもダメージを受けていることを自覚する。

(リーチが伸びる拳か……面倒であるな)

起き上がりここから反撃に入ろうと言うところに楓かえでの追撃が入る。

楓は中長距離からの援護タイプだ。

初が攻撃している間に呪文の詠唱を終えた楓は、両手を前に突き出す。その周りを二つ

の光の珠が周回し、残像が光の環を作り出す。

「はっ！」

楓が両手に力を込めると環の中心から二つの光弾が飛び出し、かなえを追尾する。かなえは素早く逃げ回るが、ここは橋の上だ。痺れを切らしてかなえが宙へ跳んだところで誘導光弾はかなえを捉えて二つ同時に命中する。

「ああああああああああ！」

小さな叫びと共に地面へと墜落するかなえ。もう戦えないだろう。

この間、さなえからは何の援護射撃も来ていないわけだが、これは全て海が両手に生み出した光の盾で弾いていた。そのうちの一つをインパクトの瞬間に今来た方向へ反射し、さなえに命中させて戦闘不能の状態にしていた。

「どうだ？ これが我らが朝永研究所の誇るフェルミオンチーム『陽子』だ」

橋の外から啞然として見ていた千咲に、真一は得意げに話しかける。

蚊帳の外で音声と映像をモニタリングしていたこの一連のやりとりには十数秒もかかってない。ほんの一瞬の出来事のように感じられていた。

もう決着はついたと思った朝永研究所の面々は撤収の準備を始める。

「いや、まだだ」

真一はまだ勝利を確信していない。表情を引き締めると、部下達に橋の向こう側を注視

するよう促す。

橋の向こう側にいる相手方の研究所の面々は一切の動揺を見せていない様子だった。

「やるじゃないか……」

撃墜したかなえがやつとの思いで立ち上がる。

「まだやるのか？ やめておいた方がいと思うぞ」

初ういはほぼ勝利を確信して愉悦ゆえつに浸ひたった表情で忠告する。

遠く離れたところに居るさなえもかなえと同時に立ちあがってこちらに近づいてきている。

「君達は知ってるだろうか？」

身体はボロボロになってもすつくと前を見据えてかなえは問いかける。その目はまだ輝きを失っていない。

「私達、魔法少女には電荷の他に『質量しつりょう』というパラメータがある。質量とは、言っ

まえば重さだ。君達『第一世代のクオーク』の質量はおよそ数MeVメガエレクトロンボルト。それに対して

私達『電子エレクトロン』や『陽電子ポジトロン』の質量はおよそ十分の一の0.5MeV。私達の方が圧倒的に

軽い。つまり——」

かなえは少し溜ためてから切り出す。

「——速さで負けることは、ない」

菱川橋ひしかわの向こうからやってくるさなえと、『陽子』プロトンの三人を挟み撃つ形で立っているかなえの体が強く輝きだす。

「お見せしよう、光速に迫る撃滅げきめつの陣。私達の固有魔法——『亜光速輪舞』ウンターリヒトタンツエ」

一瞬もしない直後、あれほど光を放っていた二人の姿が『第一世代のクオーク』たちの視界から消えてしまう。

そして、事態の理解のために思考が逡巡しゆんじゆんした一瞬の後に、初の表情が愉悦から苦悶くもんへと変わる。

視線を落とすが、自らの鳩尾みぞおちに叩きこまれたかなえの拳は、すでにそこにはない。どこに行つたのか？ その答えは思考するより先に感覚が教授する。

その拳はすでに右側頭部にあり、アスファルトの地面に対して水平に飛ぶ自分の異常な視界がその答えを示している。

視覚の変化から数瞬遅れて鈍器で殴られたような鈍い痛覚が急襲きゆうしゆうしてくる。

痛覚の登場の後、数メートル飛んでから事態を把握し、我に返り受け身を取る。人間の知覚を超えた速度での連撃を受けたのだ。

質量が小さいからできる、圧倒的速さによる圧倒的攻撃。素早く動かれるために手数も多く、常に動き続けているので反撃するのも難しい。

その魔法の名前の通りほとんど光速に近い速度で動き続けるかなえとさなえは敵三人を取り囲むように円状に移動しながら逐一攻撃を加えてくる。

先ほどまで遠距離からの狙撃に徹していたさなえも今は前衛で近接戦闘を行っている。あの速さで動きながら援護なしでメンバー全員が前衛で戦うのだ。玉砕覚悟の特攻には違いないだろう。

逃げ場を失った三人は防戦一方だが、かなえとさなえは守りの堅そうな海を重点的に狙い、盾を貫いて多段の攻撃を加える。

海の盾の魔法はもともと彼女の弱い身体を守るために編み出したものだ。ゆえに、盾を突き破られると弱い。盾を失ってから海が地面に伏すまで、そう時間はかからなかった。

「おい大丈夫か、海！」

「おーっと、妹の心配をしている場合だろうか、悠木初！」

「くっ！」

近接戦闘に長け、今まで全ての攻撃をなんとか守り切っていた初に、はじめてのクリー

ンヒットが入る。それはかなえの右エルボーだった。

鳩尾みぞおちに深々と突き刺さった肘ひじをなんとか外すが、初は意識が朦朧もうろうとして右膝をアスファルトについてしまう。

「くっそ……ッ！」

「——何か手はないんですか、朝永所長！」

遠くから見守っていた千咲が叫ぶ。目の前にあまりにひどい状況に静観などしてられない。

あれはただの集団暴行リベンチだ。

「ない、ことはない」

真一は目線を鋭くする。

「どうするんですか!？」

「あの二人が今使っている固有魔法アイゲンマジックは『陽子プロトン』にもあるにはあるんだ」
真一は躊躇ためらいがちに続ける。

「……だが、固有魔法はチーム全員が一丸となって使う魔法だ。誰か一人でも欠けていてはいけない」

「じゃあ……」

「そうだ。おそらく今、少なくとも海は氣を失っている。気付けをするにも初も楓もその場を動けない状態だろう。ああなってしまうと固有魔法が発動できる可能性は極めて低い」

「……他に方法はないんですか？」

「二つある。一つは『擬原子』^{ポジトロニウム}の固有魔法が限界を迎えるのをただひたすら耐えて待つ。あの速さで常に動き続けていれば、いつか必ずあの二人は身体にかかる負荷に耐えきれずに戦闘不能になる。だが、これも厳しい。こちらが倒れるのが先だろう」

「もう一つは？」

「千咲、君が戦うことだ」

予想だにしない回答に鳩が豆鉄砲を食らったようになる千咲。同時に昨日の恐怖が遅れてきた冬を告げるように身体を凍りつかせる。

「確かに実験によって魔法少女が死ぬことはない。適切な治療を施されるから後遺症なく普段の生活に復帰できる。だが、私情を挟んでしまうと、あの子たちは自分の娘のようなものだ。娘がいたぶられているのを見て平静で居られるほど俺は非情じゃないんだ」

「……」

千咲は俯く。あの激闘の場に自分が行っても足手纏いになるだけだろう、と思ってしまう

う。

「もちろん推奨はできない。君はまだ変身の仕方もわからないし、呪文も一つたりとも知らない。だが、君はあそこにいる誰よりも高いポテンシャルを秘めていると俺は考えているし、君ならきつとできると信じている」

「……わかりました」

——役に立つかもしれないなら行くしかないじゃないか。

——初、海、楓は昨日、私を助けてくれたんだ。

——今度は私が三人を助ける番だ。

「やります。私、戦います」

千咲は重々しく頷き、決意する。

「まずこれを飲め。これは自分は魔法少女になりますっていう意思表示みたいなもんだ」

千咲は渡された二錠のカプセル状錠剤を飲みこむ。

「いいか、まずは目を閉じて強い自分を思い浮かべる。強い自分。魔法で助けたい人を救える自分。強く念じれば魔法少女に変身できる」

言われた通りにすると、千咲の身体が桜色の光に包まれる。自分でも余りの眩しさに目を閉じてしまうが、目を開けると、そこには変身した自分がいた。

「上出来だ。戦闘中のメンバーの入れ替えは一応認められているがそのためには入れ替わる相手とタッチをして入れ替わらなければならぬ。……初、聞こえるか！」

『……なんだオツサン！ 良い作戦でも思いついたか!?’

「今から千咲と海を入れ替える！ 千咲に大魔法で決めてもらう。だから橋の先の方まで海と楓を連れて来られるか!?’

『新人にやらせるつもりか!?’

「そうだ!?’

『なんだよそれ、こんなときにもお得意の賭けかよツ!?’

「俺は理論屋だ、ちゃんと根拠はある！ それに、俺の賭け、外れたこと無いの知ってるだろ??’

『……わかったわよ。乗ってやろうじゃないの、その賭けに!?’

実験前に張り付けた電極に内蔵されていた無線で初を説得した後、千咲の方へ振り返る。

「今から最強の魔法を教えてやる。海と入れ替わってあの二人に接近したらぶちかませ!?’

「はいっ!?’

決意の千咲は力強く頷いた。

初めは絶望的に隙のない完全な攻撃に見えた固有魔法『アイゲンマジック亜光速輪舞』であつたが、その

キレは段々と落ちてきていた。

完全に動きが止まるわけではないが、それを繰り返している江上^{えがみ}姉妹は確実に^{ひろう}疲弊してきている。

所詮は亜光速。疲労してくればどんどん動きは遅くなって、光速から遠ざかっていく。
(見えた!)

「はあああああ!」

初は耐えながらも気を銜って両手に気を集め、姉妹のどちらかに渾身のダブル^{しようてい}掌底を叩きこむ。

ジャストミートとはまではいれないが、命中した相手の動きを大きく逸らし、動揺を誘って隙を作る。

「離脱するよ、楓!」

「わかったわ!」

初は海を左手で脇に抱え、両足に残った魔力を全て注ぎ込み、今し方作った活路へ向けて踏み出す。

「よっしやあああああ」

全魔力開放。素早いブーストを見せ、『亜光速輪舞』の領域から離脱する。江上姉妹ほど速くはないが、反応がワンテンポ遅れた姉妹は追撃が間に合わない。

直撃を受けた江上姉妹は身体から何か靈魂のようなものが飛び出すと、元の制服姿に強制的に戻されてしまう。

そして、飛び出した二つの靈魂は二人ちょうど中央のところでも重なり、消滅して一粒の光の滴になって、すぐさまどこか遠くの空へ飛んで行ってしまった。

「質量つてのは確かに『重さ』、『動きにくさ』でもあるが、魔法少女の場合、同時に魔力の強さをも表している」

真一^{しんいち}は安堵^{あんど}の顔をしてから、賞賛の眼差しで千咲を見つめる。

「あの子こそ、第一世代にはない圧倒的質量を誇る第二世代の正電荷のクオーク——」

「『Cクオーク』の陣内^{じんない}千咲だ……」

第二章へつづく。